

福島さあいべ！

現地のまなび① 東日本大震災・原子力災害伝承館

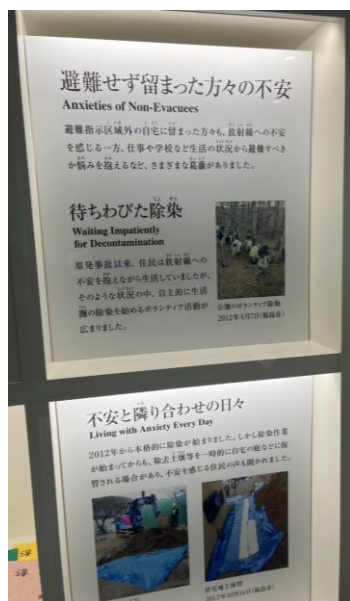
原発事故によって露わになった歪み

展示物の感想文を見て、子どもたちから原子力発電所の恩恵を受け町が豊かになり、当時は原発と地域が共存し、安心安全のエネルギーであると住民は信じていたことがわかりました。そうした安全神話が福島第一原発、

事故により崩壊し、東京電力、政府の調査報告書では「想定し

していなかった」といった言葉を繰り返すようにこの事故は原発を推進する資本・政府により押し付けられた人災であることがわかります。感想文では「科学の進化も大事だけど、自然界との共存も大切だと思います」と書かれており、原発によって自治体財政や地域が豊かになるかもしれないが、住民の生活や命を天秤にかけ、誰かの犠牲によって釣り合う問題なのではないでしょうか？

事故調報告書では「広範な避難区域設定を想定していない自治体及び医療機関の防災計画に不備があったと言わざるを得ない」といった指摘事項が記載されており、参加者からは「国が推し進めた原子力発電なのに、地方のせいになっているのはおかしい」といった声もありました。



現地のまなび② 講演会（linkる大熊）

災害と自治体職員

愛場委員長の講演では、震災後の被災者対応と通常業務もこなさなければならないといった被災時における多忙な自治体職場の実態が報告された。中でも苦情対応の話が印象的で、「私たちはどうにもできない。あなたたちにしか助けを求めることしかできない。」と言われ、自分自身も被災者であるにもかかわらず、自治体職員として職務に専念しなければならない状況に疲弊し、多くの仲間が退職したとの報告もあった。多くの自治体では多様な業務を民間委託へと切り替え、人員確保を抑制する施策が押し進められているが、大規模災害が発生した時、どんなに自身や家族が被災しようとも、住民の為に動き続けなければならないためにも人員を増やす取り組みが労働組合では必要だと強く感じました。



講演中の愛場執行委員長（大熊町職労）

現地のまなび③ 大熊町フィールドワーク

フィールドワークで見たもの

愛場委員長案内のもと、大熊町内をバスで巡り、現状を確認しました。公営住宅や商業施設、工業団地建設のための土地開発が進んでいる地区がある一方で、少し進むとバリケードが設置されている道やその奥の家屋、震災当初の崩れた家があるままになっている帰還困難区域に指定されている区画があり、道を隔て復興の差が激しい状況を目の当たりにしました。愛場委員長からは今も建物



の解体が進められており、1か月経つと町のいたるところの風景が変わっていると話していました。しかし、震災から14年経った今も復興は道半ばで、原子力災害は復興も困難であることを確認しました。

明日、いきなり自宅に住めなくなり、数年後、自宅や思い出の建物が無くなることを想像つくでしょうか？

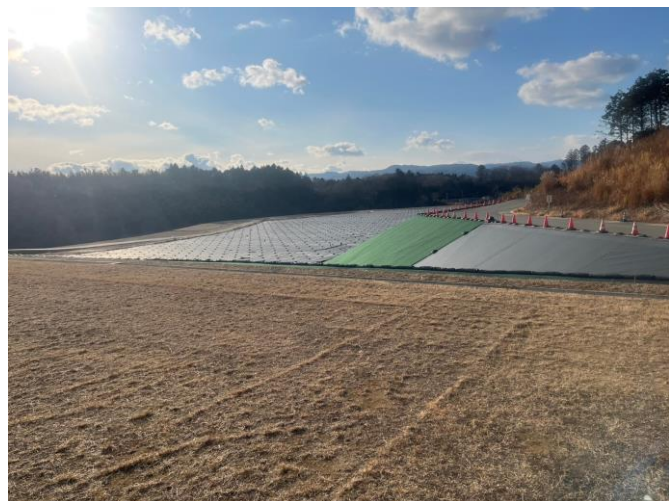


現地のまなび④ 中間貯蔵工事情報センター

故郷を奪った中間貯蔵施設

中間貯蔵施設は除染に伴い発生した除去土壌や廃棄物等を貯蔵するための施設です。この施設の中にはもともと多くの住民が住んでいましたが、自分の土地が中間貯蔵施設として選定され、住む場所を選ぶという当たり前の人権すら国からの圧力で奪われています。

「買収された土地は自分の土地として戻することは難しい。国だろうと、ふるさとを潰して施設にする権利はないはず」との声がありました。当初は買収に反対しても、買収額を提示されると、泣く泣くふるさとを手放す決断を迫られたという話がさ



されました。買収を含めた中間貯蔵施設にかかる費用は、膨大な税金がかかっています。原発事故がそもそも起きなければ、中間貯蔵施設が作られることも、故郷がなくなることも、税金がかかることもありませんでした。お金はこの社会ではなくてはならないものです。でも、お金だけですべての問題を解決することができますか？ かけがえのない家族、地域、職場などのつながりを破壊するほど、原子力の力は強大です。

